

伊勢伝考

— 敦慶親王と伊勢 —

岡崎知子

難波瀉短き声のふしの間も逢はで此の世を過ぐして

よとや

伊勢

深くのみ思ふ心は声の根のわけても人に逢はむとぞ

おもふ

敦慶親王

平安時代前期に於いて小野小町に次ぐ女流歌人伊勢の存在は、やがてそのむすめ中務を経て平安時代中期のいわゆる女房歌人全盛時代を迎える端緒をなすものと考えられる。

「伊勢集」を通して形成せられる伊勢伝の外廓は、いくつかの頂点を示しつつ、その確かならざる晩年の薄明をも推察せしめるものであった。私は先に伊勢の一生をその作品との関連に於いて次のごとく区分した。

(一) 女房時代 — 恋の贈答歌

(二) 御息所時代

(三) 敦慶親王家時代

(四) 晩年

歌合

屏風歌

このうち(一)、(二)については既に考察したので、今回は(三)、(四)について左の項目に従って述べたいと思う。

1 敦慶親王

2 敦慶親王と伊勢

3 伊勢の年齢

4 晩年の伊勢とその作歌活動

5 伊勢をめぐる人々

伊勢は宇多天皇の皇后温子の女房として仕えるうち、たまたま宇多天皇の御寵愛を得、皇子まであげるに至っ

たが(前稿)^②、なお、其後中務卿宮敦慶親王に仕え、親王との間に、のちの女流歌人中務をもうけた。従つて親王との出会いは伊勢の女性としての最後の機会であつたといえよう。また、この敦慶親王家時代から晩年を通じて、伊勢は当時の宮廷専門歌人の貫之や躬恒に匹敵する唯一の女流であつた。その伊勢の作歌活動を追求し、かつ、能うかぎり實際生活の足跡を辿つてみようとする事が本論の目的である。はじめにこの若き親王「あつよしのみこ」について考察しよう。

1 敦慶親王

親王は宇多天皇の第四皇子として仁和三年(八八七)に出生せられた。御母は内大臣藤原高藤女、贈皇太后胤子である。従つて親王は醍醐天皇の同母弟に当られるわけである。寛平元年(八八九)三歳の時親王宣下をうけ、翌寛平二年(八九〇)四歳で、御兄の維城親王(醍醐)と共にそれまでの御名「維蕃」を「敦慶」と改められた。其後の元服、叙位、納妃等の時期については知られていない。親王の妃は皇后温子所生の異母妹均子内親王であるが、延喜十年(九一〇)に薨せられた。時に内親王は二一歳であられた事から推定して、親王との結婚は数年前の

延喜五、六年の頃でもあろうかと思う。

次に親王の官歴については断片的にしか知られていない。親王は中務卿、式部卿、大学別当等を歴任せられている。中務卿に任ぜられた時期は確実にはわからないが、記録の上では延喜十三年(九一三)三月に行なわれた「亭子院歌合」^③に「中務の四のみこ」と見えるのが最も早い。式部卿に転じた時期については既に萩谷朴氏が「平安朝歌合大成」巻一において指摘せられたように、「貞信公記抄」の延長二年(九二四)正月廿七日の条に「中務親王」と見え、翌延長三年(九二五)正月三日の「御遊抄」所引の「御記」に、「式部卿親王」と見えるところから、この間に中務卿から式部卿に転ぜられたことが知られる。ともかく、確実に中務卿であられた時期は延喜十三年から延長二年までの十五年間で、さらに延喜十三年よりも若干年さかのぼり得る可能性がある。また式部卿であられた時期は延長二、あるいは三年(九二四・五)から薨去の延長八年(九三〇)二月までの約六年間である。なおこの間延長三年八月四日には大学別当を兼任された。^④

さて親王が、風流韻事を好ませられた宇多天皇の御子として、御兄の醍醐帝と共に優雅な生立ちをされたであ

ろうことは想像にかたくない。親王が和歌を好まれ、かつ管絃の道にすぐれておられた事は、親王に關する断片的な記録によっても窺われる。親王の和歌は勅撰集では「後撰集」に三首をとどめるのみであるが、そのほか「伊勢集」「大和物語」等に数首みられる。また、宇多、醍醐天皇の催された歌合にも参加せられており、親王御自身も伊勢を召して前裁合を催されたりしている。なお親王に仕えた女房の中には伊勢のほかにも、式部卿敦慶親王家大和や、式部卿宮の出羽の御のように、その歌なり逸話なりが伝えられている者もある。一方管絃の道にかけても、「眞信公記抄」、「日本紀略」、「御遊抄」所引「御記」等の記録によれば、親王は行幸、神事、朝賀、内宴、御遊等に際して笛を吹き、鼓を打ち、箏・琴を弾じ、絃歌を奏し、あるいは踏歌を舞いなどしておられる。賀茂の祭に人長をつとめられたこともある。

かように文学的にも、また音楽の方面にかけてもすぐれた才能を持って居られた親王は、「本朝皇胤紹運録」、「河海抄」等の伝えによると、その上輝くばかりの容貌をそなえておられ、世の人は親王を「玉光宮」と申し上げていたという事である。かの「源氏物語」の主人公光源氏の君は、かような親王のごとき方を想定して書かれた

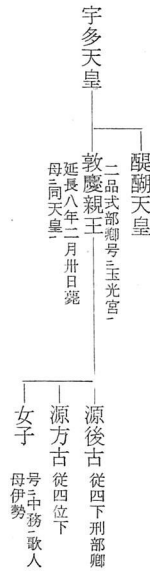
ものであろう。同物語に見られる「伊勢集」の影響と共に考え合せられることである。因みに「河海抄」^註は光源氏について「亭子院第四皇子敦慶親王、号玉光宮、好色無双之美人也。」と注記している。

かような美貌の貴公子であられた親王はまた女性関係も多く、「古今集」、「後撰集」、「大和物語」等には、親王をめぐってさまざまの女性の恋物語が伝えられている。すなわち親王は妃、均子内親王が居られたほか、宇多天皇皇女桂宮孚子内親王に親しく住まわれ(大和物語二〇段)、また閑院の五の皇女(古今集哀傷)、二条(あるいは三条か)の御息所(大和物語一八・一九段)、女三の皇女(後撰集恋心)、源頼女(後撰集恋心)等とも契りをおかわされたようである。中にはまた桂の皇女の宮に仕える童女(大和物語四〇段)のごとき淡い可憐な恋も見られる。このほかさらに伊勢とも契りを結ばれたのであるから、好色無双の貴公子といわれるだけのことはあったのである。

かくて親王は延長八年(九三〇)二月廿八日、四四歳を以って薨せられた。さてかような敦慶親王と、伊勢との間柄はどのようなものであったかを次に考察しよう。

2 敦慶親王と伊勢

「本朝皇胤紹運録」の敦慶親王の系図を見ると、



右のごとく親王の御子として源後古、同方古、中務の三人をあげているのである。このうち後古、方古の二子息はいずれも皇孫の源氏として臣下に列し、從四位下で終っているようである。その母の名を記さず、また他に徴すべき記録もないので、これが伊勢の所生であるどうかは不明である。しかし中務が親王の御女で、しかも伊勢を母としている事は「貫之集」および「信明集」の詞書によって明らかに知られるところである。すなわち「貫之集」に、

敦慶の式部卿のむすめ、伊勢の御の腹にあるを、住む所近くありけるに、折りて瓶にさせる花をおくる
とて、
(「拾遺集雜春」の詞書はほこれに同じ)

歌略す

という詞書が見え、また「信明集」にも

敦慶のみこのむすめに、

歌略す

と詞書して、中務に贈った信明の歌が見られる。また「拾遺集 雜秋」および桂宮本「中務集」によれば、中務は村上天皇の御召をうけて伊勢の家集を献上しており、その際に御製を賜っている。今「中務集」の詞書によれば、

親の伊勢が歌、召しありて内に奉りし奥に、
時雨つつふりにし宿のことははかきあつむれどとまらざりけり
御返し
(村上天皇)

昔より名高き宿のことははこのもとにこそ落ちつともみえるのである。以上のごとき諸点から、中務が伊勢を母とする敦慶親王女である事はまず信用してよいと思う。従って親王と伊勢との間柄もこれによって明白な事実といわなければならない。

ところで、伊勢が親王の許に参るようになった経緯については殆んど知られていない。ただ、中宮温子に仕えていた伊勢が、延喜七年(九〇七)中宮の崩後、しばらく里居しておつたらしい事は前稿で述べた。そして其後は

おそらく中宮の御所であつた東七条宮、すなわち亭子院にとどまつて、中宮の忘れ形見の均子内親王に仕えていたのではないかという事が考えられる。「大和物語」一四七段の、津の国の「をとめ塚」の物語の条に、

(前略) かかる事どもの昔ありけるを、絵に皆かきて、故后宮(温子)に奉りたりければ、これが上を、みな人々この人に代りて詠みける。伊勢のみやすん所、男の心にて、

かげとのみ水の下にてあひみれど魂なきからはかひなかりけり

女になりて、女一のみこ、

かぎりなく深くしづめるわが魂はうきたる人に見えむものかは (以下略)

とあり、女一の宮均子内親王を囲んで、伊勢をはじめ兵衛衛婦、糸所別当ら后宮の女房が、この物語に題して歌を詠み合っている事が知られる。このような事柄は、それが温子の生前であれ薨後であれ、ともかく実際にあつたものであろう。均子内親王はおそらく母后宮の御所に住んでおられたのであろうから、后宮方の女房が温子の薨後ひき続きその姫宮に参るといふ事はあり得るであらう。

ところで均子内親王は、三年ばかり後延喜十年(九一〇)一一歳で母后の跡を追われてしまった。仮りに伊勢がこの内親王に仕えていたとしたら、その後の去就はどうなつたのであろうか。

ここで考え合せられる事は、均子内親王が敦慶親王妃であられた事と、親王が亭子院に住んでおられたことがあるという事である。前者については「日本紀略」、「一代要記」、「皇胤紹運録」等にその旨の記述^⑨がある。後者については「大和物語」一二二段に、

同じ宮(故式部卿宮)、おはしましける時、亭子院に住み給ひけり。この宮の御もとに兼盛まゐりけり。召し出でて物のたまひなどしけり。失せ給ひてのち、かの院を見るにいとあはれなり。池のいとおもしろきに、あはれなりければ詠みける。

池はなほ昔ながらの鏡にてかげ見し君がなきぞ悲しき

と見える。亭子院は「拾芥抄」諸名所部第廿に、「亭子院、七条坊門北(南)西洞院西二町、寛平法皇御所、元東七条后(温子)家」とあつて、宇多天皇が退位せられてから御所とされたいわゆる亭子院は、中宮温子の東七条の邸宅であつたのであるから、敦慶親王、均子内親王

いずれもここに住まわれる理由は十分ある。まして実際上夫婦でもあられたのであるから、伊勢も何かの折に親王に接する機会がなかったとは云いきれない。

ところで「伊勢集」に、親王に関して次のごとき伊勢の歌が見られる。

中務の宮の家の池に、舟をつくりておろし、はじめ
て遊びけるに、法皇御覧じにおはしまして、夜さり
つ方帰らせ給ひなむとしける折に詠みて奉りける
水の上に浮べる舟の君ならばこそ泊りと言はましも
のを

これは敦慶親王邸^⑩に催された水上の遊宴の折の詠であらう。この日宇多院も幸せられてこれを御覧になった。「水の上に」の歌は伊勢が当日の来賓である宇多院に、あるじ側の親王に代って挨拶の心をのべたものである。そして伴信友が「此の宮に召されてありける程の事なるべし(表章伊勢日記附証)」と指摘しているように、この時伊勢は敦慶親王に仕えていたと考えてよいようである。なおこの歌は詞書も殆んど同じくして「古今集雑上」にも見える。とするとこれは「古今集」が収録している歌の製作年代のはば下限とみなされている延喜十三・四年(九一三・四)頃より以前の事と考えなくてはな

らないであろう。従って伊勢は遅くとも延喜十三・四年頃までには親王家に仕えていた事になる。

記録類によると親王は御父宇多院の御幸、御宴、歌合など種々の行事に侍しておられる。伊勢もまた後宮に仕える身として当然そうした場合に奉侍する事があつたであらう。例えば亭子院歌合などには、伊勢は歌を詠進し、あるいはまた当日の模様や歌の判詞を筆録した仮名日記も伊勢の筆^⑩であると伝えられている。親王もまた左の方人として参加しておられる。かくて伊勢が三度宮仕して敦慶親王に参るという事も、当時の狭い宮廷社会に於いては容易にあり得たと考えなくてはなるまい。そしてその時期も延喜十年(九一〇)二月、均子内親王が薨ぜられてからの事と考えるのが自然であろう。「伊勢集」を見ると親王について、中務卿宮、式部卿宮の呼称が用いられており、さらに薨去の折の悲歎、述懐の歌も見える。従って伊勢が親王と交渉をもつたのは、多少の消長はあつたにしても、その中務卿宮時代から晩年に至るまでの、年代で云えば延喜十年頃以降延長八年までのおよそ二十年間と見る事ができる。

さて次に、家集を通してみられるところの伊勢と親王との間柄はどのようなものであろうか。

春宮の御息所の御賀を中務の宮のし給ひける御屏
風に、若菜摘めるところ、

春日野の若菜の数は残してむ千歳の春も君ぞつむべき

(他に一首略す)

詞書の「春宮の御息所」はおそらく醍醐天皇の中宮で、
先坊保明親王並びに東宮寛明親王(朱雀帝)の御生母穩
子の事であろう。ともかく敦慶親王の行なわれた春宮の
御息所の御賀の屏風歌を伊勢が詠進しているのである。
また、

式部卿の宮の前裁合に、草のかう

草のかう色かはりゆく白露は心おきても思ふべきかな

りうたん

風寒み鳴く鷹がねの声すなりうたん衣をまづやかさま
し

これは敦慶親王邸に催された前裁合に伊勢が詠じた巧み
な隠題物名の歌である。かように伊勢は親王の許にあつ
ては専ら歌人としてのすぐれた技量をもって奉仕してい
たようである。風騒の人敦慶親王の宮家は、このほか大
和や出羽の御のごとき歌人を女房として擁していたので
ある。

花のいとおもしろきを折りて式部卿の宮にまゐら

すとて

故里のあれはてにける秋の野に花みがてらに來む人も
がな

御返し

(親王)

秋の野にわれまつ虫の鳴くといはば折らでねながら花
はみてまし

これまでにあげたものはいずれも親王の命、あるいは依
頼があつてのものと考えられるが、これは少しそれらと
趣きを異にするようである。この贈答は明らかに相思の
間柄にかわされたものである。秋草の花につけて里居の
伊勢の許から贈られた歌に対し、「秋の野にわれまつ虫
の鳴くといはば……」の返歌には、若い親王の直情径行
の気性が窺われる。

また、箏琴を通じて親王と伊勢とが唱和しているもの
もみられる。

故中務宮、琴を借り給ひて返し給ふとて (親王)

あづま琴春の調をかりしかばかへしものとも思はざり
けり

返し

程もなくかへすにまさる琴の音は人のとがめぬ音をや
添ふらむ

又あれより

(親王)

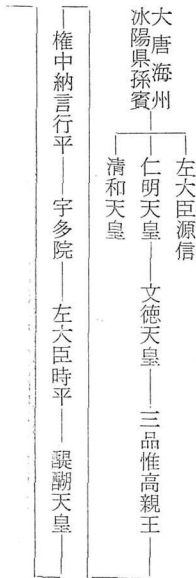
かへしてもあかぬ思ひを添へつれば常より声のまさるなるらむ

返し

常よりや添ふる心もかへりけむしらぬ声なることも聞えぬ

一首目は琴の呂律の音調を変えらるいわゆる「かへり声」と、借りた琴を返す事とを懸けて詠んだものであるが、親王の歌に、「……かへしものとも思はざりけり」「……あかぬおもひを添へつれば……」とあるのは、楽器そのものに対する愛著よりも、伊勢に対する愛情のこまやかさを感じさせるようである。因みに「秦箏相承血脈」という書は、箏（箏は秦声なりというところから秦箏と云う）の伝授に関して次のごとき相承のあった事を伝えている。すなわち、

(群書類従正篇卷第三四九管絃部 九所収)



皇太子保明

重明親王

長明

雅明

兼明

勤子内親王

伊勢

從三位博雅

関白実頼

中務

敦慶親王

左大将保忠

村上天皇

具平親王

微子女王

女御芳子

左大将濟時

これによると、宇多院——伊勢——敦慶親王という相伝の系譜も辿れる事になる。ただしこの贈答では「あづま琴」とあるから、六絃のやまと琴か、あるいは七絃のきんの琴であったのであろう。記録に徴すれば親王は箏の琴、きんの琴のいずれをも弾じておられる。

ともかくかように和歌ばかりでなく、音楽を通じて親王と伊勢とは、主従の間柄というより、まさに琴瑟相和す状態にあった事が知られるのである。

延長八年(九三〇)二月廿八日(本朝皇胤紹運録は卅日に作る)二品式部卿宮敦慶親王は四四歳を以て薨去せられた。時はあたかも桜花の満開の頃であった。親王の伯父君にあたる三条右大臣藤原定方は、親王の薨去を悼んで梶中納言藤原兼輔と歌を詠みかわしている。すなわち

「大和物語」七一段に、

故式部卿の宮うせたまひける時、きさらぎのつごもり、花のさかりになんありける、堤の中納言のよみたまひける

咲き匂ひ風まつほどの山桜人の世よりは久しかりけり
(権中納言兼輔集にも見える)

三条の右のおとどの御返し

春々の花は散るとも咲きぬべしまたあひがたき人の世ぞ憂き
(三条右大臣集にも見える)

この人々と親王との関係を簡単に図示すると、



すなわち、定方は親王の御生母胤子の兄に当り、親王にとつては里方の後見者の位置にある人である。兼輔は定方の従兄弟で、かつ女婿でもある。親王の里方の人々はその薨去を悲しんだ事は云うまでもない。殊に定方は親王をいつくしみ、もてはやした事は「三条右大臣集」の次の歌によつてもうかがわれる。

相撲の還饗かへらあるじの暮つ方、女郎花を折りて式部卿のみ

この挿頭さしづしにさし給ふとて、

をみなへし花の名ならぬものならば何かは君が挿頭にもせむ

そして後年親王が薨去せられてから、

故式部卿の宮に、三条の右のおとど、異上達部など、類してまゐり給ひて、碁打ち御あそびなどし給ひて、夜ふけぬれば、これかれ酔ひ給ひて、ものがたりし、かづけものなどせらる。をみなへしをかざし給ひて右のおとど、

をみなへし折る手にかかる白露はむかしのけふにあ

らぬ涙か
(三条右大臣集にも見える)

となむありける。こと人々の多かれど、よからぬは忘れにけり。

と「大和物語」二九段に語られている。

親王の薨去が伊勢にとって限りない悲しみであつたろう事は、家集にみられる僅かな哀傷歌からもうかがわれる。

式部卿宮の失せ給ひて、御四十九日果てて人々まかづるに

悲しさぞまさりにまさる人の身にいかで多かる涙なるらむ

君により儂き死にや我はせむこひかへすべき命ならぬ
に

故式部卿宮の御手書かせ給ひけるを見て

なき人の書きとどめけむ水茎はうちみるよりも流れそ
めける

親王の死を悼む伊勢の歌としては僅かに右のごときものがみられるにすぎない。詞書によれば、伊勢は親王の薨去の頃なおその宮にあり、すくなくとも四十九日の御法事がすむまではとどまっていたものようである。「悲しきぞ……」の歌には、泣いても泣いても泣ききれない悲しみの中にある伊勢の姿がみられる。

かくて親王と伊勢との間柄は終りを告げる事になるのであるが、その頃親王の女の中務は何歳くらいになっていたのであろうか。また当時伊勢は何歳くらいであったのだろうか。延長八年(九三〇)を下限として遡ってその契約の結ばれた時期を考えるとそれは先に述べたごとく延喜十年以降十三年くらいまでの間に求められるようである。そして結果的に云って中務の出生もまたほぼその頃と推定せられるのである。中務の出生時を直接に知る材料はない。ただ、その称呼から父宮の中務卿時代の出生であるという事はいわれておるようである。だがそれは十

五年以上の任期があるのであるから、称呼の由来を説明する事にはなっても、出生時の推定には役立たない。それ故これにはまず母伊勢の年齢を考察してみる必要がある。

3 伊勢の年齢

伊勢の年齢を推定した最初の人は近世の伴信友であろう。彼はその著「表章伊勢日記附証」の中で、「さてこの人いつの頃、いくつばかりにてみまかりたるにか、ものに見あたらず。集に、陽成院の帝の御七十の賀の歌見えたり。此の御賀は承平七年なるべし。伊勢の皇子生み奉りたる寛平の末を、しばらく廿歳ばかりの時として推しはかれば、承平七年は六十一、二歳の頃にあたれり。」と云っている。かように伊勢が帝寵を得た寛平の末頃に年齢推定のめどを置く事は、ほぼ当を得た見解であると思う。が私はさらに伊勢の年齢を、伊勢が直接に関係を持った人々、すなわち宇多天皇をはじめ温子中宮、藤原時平、同仲平、および敦慶親王の年齢(これらの人々は皆年齢が判明している)との比較に於いて考えてみた。このうち家集の詞書と、これを裏付ける資料の面とから考えて、最初に契りをおこなった仲平の年齢に伊勢のそれは最も接近しているとみななければならないようである。それ

〔伊勢年齡比較推定表〕

天和八年	天慶六年	承平七年	承平元年	延長八年	延長四年	延喜七年	延喜十年	延喜九年	延喜七年	昌泰二年	寛平九年	寛平五年	寛平三年	寛平二年	仁和四年	仁和三年
九四五	九四三	九三七	九三一	九三〇	九二六	九一三	九一〇	九〇九	九〇七	八九九	八九七	八九三	八九一	八九〇	八八八	八八七
			*65	64	60	47	44	43	41	33	31	27	25	24	22	21
								*39	37	29	27	23	21	20	18	17
									*36	28	26	22	20	19	17	16
*71	69	63	57	56	52	39	36	35	33	25	23	19	17	16	14	13
				*44	40	27	24	23	21	13	11	7	5	4	2	1
(71)	(69)	(63)	(57)	(56)	(52)	(39)	(36)	(35)	(33)	(25)	(23)	(19)	(17)	(16)	(14)	(13)
宇多院 (温子の兄) 温子 (仲平の姉) 仲平 敦慶親王 (推定) 伊勢																
事 項 () 内は推定 宇多帝即位。敦慶親王誕生。父藤原経隆、再任伊勢守 温子入内字多女御となる (伊勢この年か翌年初宮仕) 仲平元服 父経隆、任大和守 (この年、もしくは前年) 皇太夫人班子女王歌合に詠進 宇多帝讓位。温子立后 (この年もしくは翌年皇子を産む) 宇多院出家 温子薨 左大臣時平薨 敦慶親王妃均子内親王21歳薨 亭子院歌合に詠進 (延喜十年以降此年までくらの間に中務出生) 宇多院六十御賀の屏風歌詠進 敦慶親王薨 宇多院崩 陽成院七十御賀の屏風歌詠進 権中納言藤原敦忠薨 (この頃数年間に伊勢歿すか) 右大臣仲平薨																

※数字は年齡を示す

故、しばらく伊勢を仲平とほぼ同年と見做し、それで伝記上の重要事項にさしさわりがいかどうかを検討してみると、前表のごとくである。

仁和四年、温子が十七歳で入内し、伊勢はその女房として同年もしくはその翌寛平元年頃、十四、五歳で初宮仕したと考えられる。宮仕後まもなく温子の弟仲平に思いを寄せられ、遂にこれと契った。また温子の兄時平も伊勢に近づこうとした。そうこうするうち仲平は寛平二年十六歳で元服してやがて時の大臣に婿取られてしまった。伊勢は仲平との間柄に失望して、折柄父が国司として在任中の大和国へ下った。寛平三年頃伊勢は十七・八歳くらいであろう。やがて温子に召し返されて上洛し、再び宮仕して、「皇太夫人斑子女王歌合」(通称寛平御時后宮歌合、寛平四・五年頃)に出詠している。その頃十九歳くらいに達しているであろう。其後も時平、仲平、平定文らと断続的に交渉があったらしい。やがて寛平七・八年頃、二一・二歳くらいで帝寵を得たと思われる。寛平九年、宇多帝に御讓位のお氣持があり、かの弘徽殿の壁に伊勢が歌をかきつけたという話が伝わっている。そしてこの年か翌昌泰元年頃、伊勢は皇子を産み奉った。新帝醍醐御即位と共に温子は皇太夫人となら

れ、伊勢は皇子を桂の里に養育させて、みずからは温子に仕えていた。伊勢の二三歳から二四歳くらいの時の事であろう。

延喜七年、中宮は三六歳で薨去せられ、当時まだ宮にあってらしい伊勢は哀傷の長歌を作っている。その頃伊勢も三三歳くらいに達していよう(以上前稿)。その後数年伝記上の空白があつて、その間延喜九年には時平が三九歳で薨じ、翌延喜十年には均子内親王が薨じている。

この後に於いて伊勢は敦慶親王と結ばれたのであろうと推定する。かりに延喜十一年をとれば親王は当時二五歳、伊勢は三七歳くらいで、伊勢の方が一まわり程年長である。しかしもともと親王は宇多帝の皇子なのであるから、これくらいの年齢差があるのは当然だと思ふ。そして伊勢の四十歳くらいまでのうちに中務が出生したと考へねばならないであろう。因みに中務の夫であつた源信明は延喜十年の生れである。

大体今までのところ、この推定で大過ないように思われる。この推定でゆけば延長八年親王が四四歳でこの世を去られた時、伊勢は五六歳くらいに達している。翌承平元年には宇多院が崩ぜられた。こうして伊勢の周囲は昔のゆかりとしては仲平一人を残すのみとなつた。しか

し伊勢は、其後承平七年の陽成院七十の御賀の頃、また、翌天慶元年の四宮勤子内親王の薨去の頃は六三・四歳でなお健在であった。また家集に権中納言藤原敦忠に關する詠(後述)がみられる。敦忠は天慶五年権中納言に任じ、翌天慶六年に薨じた人であるから、もしこれをその在任当時のもつれば伊勢は天慶五・六年頃まで存命しておつたとも考えられる。しかし家集にはこの敦忠の薨に關する詠もなく、また天慶八年に薨じた仲平を悼む歌も見当らない。とするとあるいは天慶六・七年頃すでに伊勢はこの世を去つていたのであるかもしれない。仲平は七一歳で薨じた。従つて伊勢も天慶八年まで存命したとすれば七十歳には達してははずである。かりに仲平と同年とすればその生年は逆算して貞觀十七年(八七六)といふ事になる。

なお伊勢の歿年について「扶桑拾葉集」の系図は「天慶二年二月五日没」と記るしている。これは何によつたものか明らかでなく、またこれを裏付ける材料もない。ただ、上に述べた事情を綜合すると、やはり天慶の末年あたりにその歿年を想定するのが自然であるように思う。

以上の伊勢年齢考は、結論的に曾沢太吉氏の御見解と

一致する。氏はまた歿年推定の傍証として伊勢の従兄弟である大学頭藤原繁時(伯父弘蔭の子)が天慶六年十二月に卒している事をもあげておられる。ともかく敦慶親王と死別してのちは伊勢の生涯も晩年に近づいたのである。では次に伊勢の晩年の生活と、歌人としての足跡について考察しよう。

——以下次号——

注

1 「大谷学報」第四一卷第四号掲載論文、「伊勢伝考——宮仕時代を中心に——」参照。

2 右の同論文。

3 「日本紀略」寛平二年十二月十七日条。「改_ニ親王等名、維城改_ニ為敦仁。維蕃改_ニ為敦慶。」と見える。なおこの後も延喜廿一・二年頃に行なわれた「内裏菊合」に「維蕃親王」と称せられている(廿卷本歌合卷、萩谷朴氏著「平安朝歌合大成」卷一参照)。

4 「一代要記」(丙集)第五十九宇多天皇、皇女、均子内親王無品、母藤温子昭宣公三女、号七条后、配舎兄敦慶親王、延喜十年二月廿五日薨。

5 「十卷本歌合卷」所収「亭子院歌合」の仮名日記本文中に見える(萩谷朴氏著「平安朝歌合大成」卷一参照)。

6 「貞信公記抄」延長三年八月四日条、「一以吏部王為大學別当、」

7 式部卿敦慶親王家大和については「後撰集恋三」、「新勅撰集恋四」および「大和物語」一七一一段を、出羽の御につ

いては「大和物語」一七段参照。

- 8 「本朝皇胤紹運録」(群書類従巻第六十 系譜部四)の敦慶親王の注記に「二品式部卿号玉光宮——」と見える。「河海抄」桐壺も同じ。

- 9 「日本紀略」延喜十年二月廿五日条、「均子内親王薨 敦慶親王室年廿一」。「一代要記」は注4参照。「本朝皇胤紹運録」

(宇多皇女) 「均子内親王配敦慶親王」

- 10 詞書の「中務の宮の家」をここで必ずしも亭子院であると見なければならぬ根拠はない。むしろこれは「大和物語」二九段にみられるように、亭子院とは別に式部卿宮邸があつたとみるべきであらう。

- 11 「甘巻本歌合卷」所収「亭子院歌合」の標題下の注記に、「有伊勢日記」とある。この注記は萩谷朴氏の御説によれば、「和歌合抄」から「類聚歌合」への間の編集上の

注記であつて、堀河朝頃の記載であるから、その点は信用してよいとの事である。なお「むらさき」昭17・10月号所載の萩谷氏の「平安朝歌合日記選釈」はこの仮名日記の作者を伊勢となす可能性を論じ、女流日記の最初のものとして史的評価を与えておられる。

- 12 「河海抄^{並十五卷}初音」所引「御記」の延喜十三年正月十四日の条に、「時子一刻、自瀧口到東宮穩子息所曹司踏舞殿^{弘徽}」とあり、この日の男踏歌には敦慶親王も参加せられた由がみえる。なお穩子は藤原基経の女で、温子(宇多皇^后)の妹に当られる。

- 13 「伴信友全集」第五所収。

- 14 「国語・国文」第四卷三号、昭9、所収論文「伊勢の御考」参照。